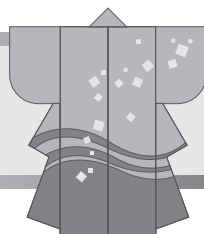


## 着物と私(11)

### 「胴着と袴」

岸本 昌明



毎回女性が綺麗な振り袖と自分との関係を寄せているこの「着物と私」ですが、今回は少し違った紹介をさせていただきます。以前図書館で日本の着物と剣道着についてのフォーラムがありましたが、自分と着物の接点はその剣道を通してのものです。

剣道をするときは胴着と袴（はかま）を着用します。この袴は袴（かみしも）と合わせ武士達の正装でした。大きな袴を付けた上で防具を付けたら運動することは難しいですから、現在袴をつけるのは演舞など極限られた場合のみになりましたが、袴には乗馬するため襠（まち）が深く作っており、両足を分けて履くなど名残が今も残っています。また足の動きを悟られない様に、裾の広がったものを着用するとも言われています。

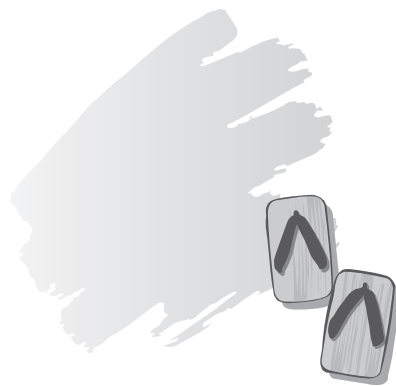
胴着や袴をきちんと着るのは今でもやはり難しいですが、初めて着させて貰った時の高揚感は堪らないものでした。自分にとって胴着と袴はスイッチのような気がします。特別な衣装を纏っているという意識があるのでしょうか。今日は体がしんどいとか疲れたなと思っていても、いざ胴着袴をつけて道場に入ると「よし、やるぞ！」と気合いが入り集中できます。

文部科学省の方針で中学生の武道必修化が始まりました。これによって剣道に触れる人が増えるのは大変喜ばしく思っています。しかし多くの学校が体操服やジャージを着て指導するという話を



聞きます。高段位の先生方には果たしてそれで文化を伝えられるのかと警鐘を鳴らされる方もいらっしゃると思います。

剣道の胴着や袴は多くの意味をもった装束で、前後両面にある襷（ひだ）の一本ずつにさえも意味が込められています。剣道の授業となるとどうしても「竹刀を持って運動する」ことに中心が置かれるとは思いますが、是非座学も充実させこういった装束の意味も理解し、文化を継いでいって欲しいと思います。



きしもと まさあき(日本語学科4年次生)